

2019. 4. 7. 受難節第5主日礼拝式説教

聖書：ヨハネによる福音書14章1-12節

『わたしは道である』

ヨハネによる福音書13章には地上を歩まれた主イエスがよいよ十字架の時近づいた、そのことを自覚されて、弟子たちとの時間をすごされたようすが描かれています。わたしたちの人生にも、最後の時近づき、そのことを受けとめながら過ごす時間というものがあります。例えば親が余命いくばくもない、という中で、家族と共に一緒に時間を過ごす、というようなときです。

主イエスは十字架の受難と死の時近づいた時、弟子たちと一緒に大切な時をすごしました。一人一人の弟子の足を洗い、その洗った足を主イエスご自身が拭かれた。その汚れを拭われた。そして互いに足を洗い合って生きることを教えられた。仕える者の姿勢を具体的に弟子たちに示された。そして弟子の裏切りも予告された。それは主イエスが弟子たちと地上の最後の時間をたんに感傷的に過ごしたのではなかったということです。弟子たちの十字架を前にしての混乱、不信仰というものをしっかり見つめておられたということ、その上で弟子たちに必要な言葉を語られたのです。「主、どこへ行かれるのですか」とペトロが尋ねる。弟子たちは不安を覚えずにはおられない、その不安の中にある弟子たちに向かって語られる言葉、それが14章の言葉です。

芥川龍之介の小説で『トロッコ』と題するとても短い小説があります。日本各地にまだ鉄道が敷かれていなかったころ、一人の少年が鉄道の工事が自分の町で始まり、その鉄道工事に使われるトロッコを見て、その走る様子を見て、なんとか自分ものれないかと思う。トロッコは上りのときは人の手で押し、下り坂になったら、トロッコに飛び乗る、まったくの人力だったが、それでも少年は乗りたいと思った。ある時優しそうな二人のおじさんが押しているとき、少年は一緒に押そうかと声をかける。するとおじさんたちはおお押ししてくれ、と応える。少年は喜んで力いっぱいトロッコを押し、下り坂になるとトロッコに乗る、その景色の美しいこと。少年はうれしくなって、上りになるとおし、下りになると乗る、を繰り返した。気がつくと、いつの間に日が暮れかかっていた。するとおじさんの一人が少年にこう言う。「我はもう帰んな」「遅くなると我の

家でも心配するから」。少年は一瞬呆気にとられる。突然一人で、今来た道を帰らなければならないことに気づき、泣きそうになりながら線路の上を走りだしていく。その帰り道の不安を芥川は描くです。

一緒に歩いてきた人が、一緒に帰ってくれると思いでいた人が突然いなくなってしまう不安。一人になってしまった心のざわめきをこの小説は鮮やかに描きます。

キリストの弟子たちの不安も少年の不安とどこかでつながっているでしょう。ここまで主イエスに従ってきて、弟子たちからすれば突然のように去っていくと言われたのです。これからも一緒だ、と思っていたにもかかわらず、突然去っていく。しかもそれは十字架刑であって、無残な死を遂げることであり、しばらく旅行に行っていなくなるのとはわけが違います。弟子たちの心は乱れたでしょう。その弟子たちに向かって、主はこう言われるのです。「心を騒がせるな。神を信じなさい。そしてわたしをも信じなさい。」

死んで去っていく人間から信じなさい、と言われて、弟子たちはどんな思いでその言葉を聞いたでしょうか。主イエスはさらに言葉を続けました。2節3節をわかりやすく読み砕くと、「神さまの家には、あなたがたの居場所がたくさんある。わたしが父の家へ赴いて、あなた方の居場所を用意したら、わたしは再びやって来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。わたしがいるところに、あなたがたもいるためである。」

ピンと来るかどうかは今置いておいて、キリストの言われることは、あなたのみこと居場所、それが神の家の中に準備されている。あるんだ。どんな場所なのか、わたしたちには想像もつかないけれど、キリストがそう確言、明確に語られるのです。わたしはその場所に先に行って、また戻ってきて迎える、というのは、二つのことが重ねられているのですが、一つは、終末の時に迎えに来る、ということ。しかしもう一つは、わたしが天に昇ったら聖霊を送って、聖霊があなたを導きキリストと共にいてくださる、ということを明らかにしてくださる、という二重の意味が込められています。

弟子たちはキョトンとしてこの主イエスの言葉を聞いたことと思います。だから、「あなた方はわたしがこれからどこに行くのかその道をあなたがたは知っている。」と主が言われたときも、「主よ、どこにいかれるのか、わたしたちにはわかりません。どうして、その道を知ることができるでしょう。」とトマスは応えたのです。まるで、さっぱり、わからない。十字架にかかることの意味も本当のところよくわからない弟子たちにとって、その十字架の先にどこに行くのかなどということは、正直まるで分らなかったで

しょう。トマスはわたしたち一人一人の代表ともいえる人です。わからないのです。いったい誰が死んでからのことがわかるのでしょうか。この世を超えた世界のことなど、誰が知りえるのか。確かにわたしたちの知恵や知性はこの世のもので、この世のことしかわからない。それは神しか、キリストしか知りえない領域です。だからこそ主イエスは、神を信じなさい、そしてわたしをも信じなさい、と言われた。それは信仰の領域なのです。

キリストはこう言われる。

「わたしは道であり、真理であり、いのちである。わたしを通らなければ、誰も父のもとに行くことはできない。」キリストはご自分のことを道だ、とここで言われます。わたしという道を通らなければ、神のもとへ行けない。わたしたちから直接神に通じる道はない、ということです。わたしたちが努力したり、修行を積み、神のもとへ行くことができる道が開ける、そういうことはない。もしわたしたちがわたしたちの最終的な居場所、わたしが本当に憩うべき居場所にいかうとするなら、それはイエス・キリストという道を通る以外にはない、ということです。

イエス・キリストの道を通っていく、といっても、それはキリストという道を究めることではない。武道や柔道や剣道のようにキリスト道なるものがある、それを究めることではない。道徳という言葉に道が入っているように、優れた倫理的な生き方を極めることでもない。イエス・キリストの道を通るとは、イエス・キリストの十字架の愛に出会うこと、わたしたちを赦し、贖い、復活して、わたしたちにいのちを与えるキリストの愛を受けること、それがキリストの道を通ること。つまりこの道は必ずいのちへとたどり着く道なのです。十字架で明らかになった愛と恵み、それが真理、まことです。そのマコトはわたしたちに命を与える。それは神のまことの中にあるいのちで、永遠の命だということまで繰り返し語ってきました。イエス・キリストは道を教える教師というだけの方ではない。確かに教える方です。だがキリストご自身が道なのです。この方の言葉を聞き、この方の愛に触れ、この方の十字架の信実に出会うことが道を歩いていることそのものであり、キリストと出会いながら私たちはこの道を旅するのです。ギリシヤ語の道という言葉は旅という意味があります。

「わたしは道であり、真理であり、命である。」十字架にかかろうとすると、主イエスが弟子たちに何としてでも伝えようとした言葉、それがこの言葉です。

もし、あなたがイエス・キリストの道を行くなら、あなたはそこでイエス・キリストを通し

て神をも知ることになる。もしあなたが、イエス・キリストの道を行くなら、そこで、キリストの与え給う真理と出会うことになる。そしてそれはまちがいでなく神の与える真理なのだ。もしあなたがイエス・キリストの道を行くなら、あなたはそこで、命を受ける。それは神が与える永遠の命なのだ。そしてそれを受けて歩むこと、それこそが神の用意しておられる場所なのだ。だから、心を騒がせるな、神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。キリストは総不安の中にある弟子たちに語るのです。

D a t a : 受難節第5主日礼拝説教

讃美 : 前306、後443

新生教会礼拝堂